

国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
第 4 冊

## 城泉遺跡

2017.12  
香川県教育委員会  
国土交通省四国地方整備局

## 序文

香川県埋蔵文化財センターでは、平成 20 年度から国道 11 号大内白鳥バイパス建設予定地内における発掘調査を順次実施しています。また、平成 26 年度からは整理事業を開始し、順次調査報告書の刊行を行っており、本書で第 4 冊となります。

本書で報告する城泉遺跡は、香川県東かがわ市白鳥に所在する遺跡で、古墳時代中期末葉から飛鳥時代の自然河川から多量の須恵器・土師器や木製品、石製模造品が出土しています。木製品には、鋤などの農具に加えて刀形などの祭祀具、準構造船の部材の可能性のある資料が含まれるなど、当時代の研究資料として貴重な出土品が多くみられます。

本報告書が、本件の歴史研究の資料として、広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、国土交通省四国地方整備局ならびに関係機関・地元関係者各位には多大なご協力とご指導をいただきましたことに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願いします。

平成 29 年 12 月 22 日

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

## 例 言

1. 本報告書は、国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事および国道 318 号改良工事に伴い、発掘調査を実施した、香川県東かがわ市白鳥に所在する城泉遺跡（しろいすみいせき）の報告を収録している。

2. 発掘調査は、国道 11 号大内白鳥バイパスについては国土交通省四国整備局から委託された。また国道 318 号改良については香川県土木部道路課から依頼された香川県教育委員会が調査主体、香川県理蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査及び整理作業の期間と担当者は次のとおりである。

### 発掘調査

期間 平成 23 年 6 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

担当 山元素子 小野秀幸

### 整理作業

(平成 28 年度)

期間 平成 28 年 7 月 1 日～平成 29 年 1 月 31 日

担当 信里芳紀

(平成 29 年度)

期間 平成 29 年 4 月 1 日～平成 29 年 4 月 30 日

担当 蔡本晋司

4. 発掘調査及び本報告書作成に際し、地元関係者をはじめとして多くの機関や方々にご指導、ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

東かがわ市教育委員会 大久保徹也

5. 報告書の作成は香川県理蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は信里芳紀が担当した。

6. 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第IV系による。また、本標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7. 遺構略号は次の略号により表示した。また、表現上略号を用いることが適当でないと判断された遺構も存在する。

SB(掘立柱建物)・SA(柵列)・SD(溝)・SK(土坑)・SP(柱穴)・SX(性格不明)・SR(旧河道)

8. 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経緯	3
第3節 調査・整理作業の体制	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	9
第1節 基本層序と遺構検出面	9
第2節 古代以前の遺構・遺物	21
4区 SR、SD	
7区 SR	
8区 SD他	
第3節 古代以降の遺構・遺物	57
1区 SA	
3区 SB、SA	
6区 SB	
1～3区 SD	
第4章 自然科学分析	68
第1節 プラント・オパール分析	68
第2節 大型植物遺体	72
第3節 昆虫化石について	78
第4節 緑釉陶器の 元素マッピング分析	84
第5節 木製品の樹種調査結果	90
第6節 木製品の樹種調査結果	94
第7節 木製品の樹種同定	108
第5章 総括	118

## 挿図目次

図1 道跡の位置 (広域).....	1	図31 7区SR7001上層・上層下位出土遺物(木器).....	43
図2 路線.....	2	図32 7区SR7001遺物分布(中層).....	44
図3 地形分類.....	4	図33 7区SR7001中層出土遺物(1).....	45
図4 周辺の道跡.....	6	図34 7区SR7001中層出土遺物(2).....	46
図5 調査区割.....	10	図35 7区SR7001中～下層出土遺物.....	47
図6 第2面全体図(統合1／600).....	11-12	図36 8区SD8001平・断面.....	48
図7 第1面全体図(統合1／600).....	13-14	図37 8区SD8001出土遺物.....	49
図8 1～4区北壁断面.....	15-16	図38 8区古墳時代前期包含層断面.....	50
図9 5・4・8区南北断面.....	17-18	図39 8区包含層遺物(1).....	51
図10 1・2・3区下位河川堆積層出土遺物.....	19	図40 8区包含層遺物(2).....	52
図11 1・2・3区下位河川堆積層出土遺物.....	20	図41 8区包含層遺物(3).....	53
図12 4区北壁断面.....	22	図42 8区包含層遺物(4).....	54
図13 4区SR4001遺物分布(上層下位).....	23	図43 第1面全体図(統合1/600).....	55-56
図14 4区SR4001上層・上層下位出土遺物.....	24	図44 1区SA1001・1002 平・断面及び周辺遺構出土遺物.....	57
図15 4区SR4001上層下位出土遺物.....	25	図45 3区・6区第1面SB分布.....	58
図16 4区SR4001上層下位出土遺物(木器)その1	26	図46 3区第1面SB3001・SB3002平・断面.....	59
図17 4区SR4001上層下位出土遺物(木器)その2	27	図47 3区第1面SB3001出土遺物.....	60
図18 4区SR4001上層下位出土遺物(木器)その3	28	図48 3区第1面SB3003・SA3001平・断面.....	61
図19 4区SR4001上層下位出土遺物(木器)その4	29	図49 3区柱穴出土遺物.....	62
図20 4区SR4001上層下位出土遺物(木器)その5	30	図50 6区第1面SB6001・SB6002平・断面 及び出土遺物.....	63
図21 4区SR4001上層下位出土遺物(木器)その6	31	図51 1区SA1001・SA1002・SD1001 平・断面及びSD1001出土遺物.....	64
図22 4区SR4001中層出土遺物(1).....	32	図52 2・3区溝平面.....	65
図23 4区SR4001中層出土遺物(2).....	33	図53 2・3区溝断面及び出土遺物.....	66
図24 4区SR4001中層出土遺物(3).....	34	図54 上位包含層出土遺物.....	67
図25 4区SR4001中層出土遺物(木器)その1.....	35	図55 遺構変遷その1(縄文時代後期～弥生時代後期 古墳時代前期～中期末).....	120
図26 4区SR4001中層出土遺物(木器)その2.....	36	図56 遺構変遷その2(古代中世).....	121
図27 4区第2面 SD4005 平・断面及び出土遺物.....	37		
図28 7区SR7001断面(南壁含).....	39-40		
図29 7区SR7001遺物分布(上層・上層下位).....	41		
図30 7区SR7001上層・上層下位出土遺物.....	42		

## 表目次

表1 国道11号大内白鳥バイパス調査・整理一覧	2
表2 調査・整理の体制	3
表3 周辺の埋蔵文化財包蔵	7

## 観察表目次

土器観察表(1)～(7).....	122～128
石器観察表.....	128
金属器観察表.....	129
木器観察表(1)・(2).....	129・130

## 写真図版目次

- 写真図版 1  
1 道路の全景 東から  
2 道路の全景 西から  
写真図版 2  
3 遺跡から北東方向を望む  
4 2区北側旧河道堆積状況 南東から  
写真図版 3  
5 2区北側旧河道堆積状況 南から  
6 2区旧河道調査状況 南から  
写真図版 4  
7 4区SR4001検出状況 西から  
8 4区SR4001調査状況 西から  
写真図版 5  
9 4区SR4001上層～中層完掘状況 東から  
写真図版 6  
10 4区SR4001上層～中層堆積状況 南西から  
11 4区SR4001上層～中層堆積状況 南西から  
写真図版 7  
12 4区SR4001上層下位木器出土状況その1 東から  
13 4区SR4001上層下位木器出土状況その2 西から  
写真図版 8  
14 4区SR4001上層下位木器出土状況その3 北から  
15 4区SR4001上層下位木器出土状況その4 東から  
写真図版 9  
16 4区SR4001中層木器出土状況その1 南から  
17 4区SR4001中層木器出土状況その2 東から  
写真図版 10  
18 4区SR4001中層須恵器・土師器出土状況 東から  
19 4区SD4005検出状況 (SR4001中層相当) 西から  
写真図版 11  
20 4区SD4005遺物出土状況 (SR4001中層相当) 西から  
21 4区SD4005堆積状況 (SR4001中層相当) 西から  
写真図版 12  
22 7区SR7001全景 (上層～中層完掘) 北から  
23 7区SR7001全景 (上層～中層完掘) 東から  
写真図版 13  
24 7区SR7001堆積状況 (上層～中層) 北から  
25 7区SR7001上層下位遺物出土状況その1  
26 7区SR7001上層下位遺物出土状況その2  
写真図版 14  
27 7区SR7001上層下位木器 (333) 出土状況  
28 7区SR7001中層遺物出土状況その1 南から  
29 7区SR7001中層遺物出土状況その2 北東から  
写真図版 15  
30 7区SR7001中層遺物出土状況その3 北東から  
31 7区SR7001中層遺物出土状況その4 北東から  
写真図版 16  
32 7区SR7001完掘 (上層～中層) 北東から  
33 7区SR7001完掘 (上層～中層) 南から
- 写真図版 17  
34 7区SR7001堆積状況 (南壁上層～中層) 北東から  
35 7区SR7001堆積状況 (南壁上層～中層) 北から  
写真図版 18  
36 7区SR7001下層堆積状況 北から  
37 7区SR7001下層堆積状況 (南壁) 北から  
写真図版 19  
38 8区SD8001堆積状況 (南壁) 北から  
39 8区SD8001全景 北から  
写真図版 20  
40 8区SD8001全景 南西から  
41 8区SD8001上層遺物出土状況 南から  
42 8区堆積状況 (東壁) 南西から  
43 8区堆積状況 (東壁) 西から  
44 8区包含層遺物出土状況 南から  
45 8区包含層遺物出土状況 北から  
46 8区SR8001全景 南東から  
47 8区SR8001堆積状況 北から  
写真図版 21  
48 3区上層遺構全景 西から  
49 3区SB3001全景 東から  
写真図版 22  
50 3区SP3009 (SB3001) 柱根・礎板  
51 3区SP3014 (SB3001) 柱根  
52 3区SP3010 (SB3001) 柱根  
53 3区SP3010 (SB3001) 砂板・根固め  
54 3区SP3015 (SB3001) 柱根  
55 3区SP3023 (SB3001) 柱根  
56 3区SP3024 (SB3001) 柱根  
57 3区SP3024 (SB3001) 砂板  
写真図版 23  
58 3区SB3002全景 東から  
59 6区SP6001 (SB6001) 柱根  
60 6区SP6002 (SB6001) 柱根  
61 6区SP6003 (SB6001) 柱根  
62 6区SP6003 (SB6001) 柱根定掘  
写真図版 24  
63 1区SA1001全景 東から  
64 2区SD2001堆積状況 東から  
65 2区SD2001全景 東から  
66 3区SD3004全景 西から  
67 3区SD3004堆積状況 東から  
写真図版 25  
68 5区①SR5001全景 北東から  
69 5区①SR5001堆積状況 東から  
70 5区②全景 南から  
71 5区③全景 南から  
72 9区全景 東から  
73 9区堆積状況 北から  
写真図版 26～44  
出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

国道11号大内白鳥バイパスについては、国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所により県東部の東かがわ市での交通の混雑緩和や安全確保、インターチェンジ（IC）へのアクセス性向上等を目的に、平成12年度から整備が進められてきた。県教育委員会（以下、県教委）では、国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所に対して路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて断続的に協議を実施し、平成18年



図1 遺跡の位置（広域）

度からは、用地取得が完了した範囲より順次試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況が確認され保護措置が必要と判断された箇所については、工事実施に先立ち本発掘調査を行い埋蔵文化財の保護に努めてきた。城泉遺跡は、県教委が平成22年度に東かがわ市白鳥において試掘調査を実施した際に新たに確認された包蔵地であり、4,686 m<sup>2</sup>の保護措置が必要と判断された。

なお、本事業に伴う全体の埋蔵文化財保護状況については表1の通りである。

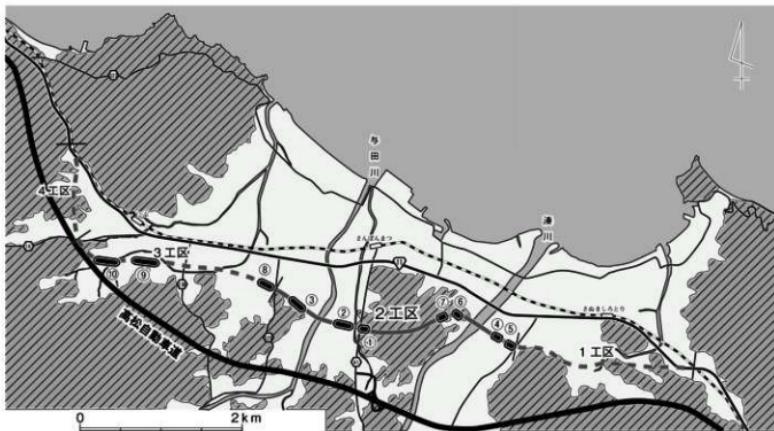


図2 路線  
1.仲戸東遺跡 2.仲戸遺跡 3.營水中筋遺跡 4.田中遺跡 5.城泉遺跡 6.山下岡前遺跡 7.渾山下古墳 8.西村遺跡 9.内間遺跡 10.三段北遺跡

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘調査	整理作業	内容
1	仲戸東遺跡	東かがわ市川東	1,251	H20.7 ~ H20.10,H25.3	H26.6~11	古墳時代後期の埴輪生産関連遺構
2	仲戸遺跡	東かがわ市川東	3,695	H20.7 ~ H21.1	H26.6~11	縄文時代後期河川跡・弥生時代河川跡・大溝跡
3	營水中筋遺跡	東かがわ市中筋	4,459	H20.9 ~ H21.3	H27.7~10	中世集落跡
4	田中遺跡	東かがわ市白鳥	2,855	H22.6 ~ 10	H27.11~H28.1	縄文時代晩期河川跡・弥生時代後期集落・古代集落
5	城泉遺跡	東かがわ市白鳥	4,486	H23.6~H24.3	H28.7~H29.1,H29.4	古墳時代河川跡・古代～中世集落跡
6	山下岡前遺跡	東かがわ市湊	2,757	H24.11~H25.3	—	弥生時代後期集落跡・古代寺院関連遺構
7	渾山下古墳	東かがわ市湊	1,600	H24.11~H25.2	—	古墳時代前期古墳(円墳)跡
8	西村遺跡	東かがわ市西村	3,660	H25.6~9, H26.6~11	—	弥生時代～古墳時代の集落跡と水路跡・古代集落跡
9	内間遺跡	東かがわ市町田	6,877	H26.6~9, H27.7~H28.1	—	弥生時代集落跡・古代集落跡と大型灌漑水路・中世集落跡
10	三段北遺跡	東かがわ市三段	1,919	H28.10.1~H29.1	—	古代河川跡

表1 国道11号大内白鳥バイパス調査・整理一覧（平成29年3月31日現在）

## 第2節 調査の経緯

本発掘調査は、香川県埋蔵文化財センターを調査担当とし、平成23年6月1日から平成24年3月31日までの期間で実施した。また、保護措置が必要と判断された4,686m<sup>2</sup>の内、国道318号との交差点改良部分の200m<sup>2</sup>(5区)については、上記期間内に県土木部を原図者として合わせて調査を実施した。

整理作業は、国道本線部分の4,486m<sup>2</sup>を対象として平成28年7月1日～平成29年1月31日まで実施し、国道318号交差点改良部分の200m<sup>2</sup>について平成29年4月1日～平成29年4月30日までの期間で実施した。

## 第3節 調査・整理作業の体制

発掘調査・整理作業の体制については表2のとおりである。

平成23年度発掘調査体制

生涯学習・文化財課			埋蔵文化財センター		
船橋	課長	坂井宏秋	船橋	所長	藤好史郎
	副課長	亀山 隆		次長	真鍋正彦
船橋・生涯学習推進グループ	副主幹	香西としみ	船橋課	課長(兼)	真鍋正彦
	主任主事	丸山千晶		副主幹	林 文夫
文化財グループ	課長補佐	西岡達哉		主任	古市和子
	主任文化財専門員	森下英治		主任	中川美江
	文化財専門員	松本和彦	調査課	主任	高木秀哉
				主任	広瀬健一
				課長	森 格也
				文化財専門員	山元素子
				文化財専門員	小野秀幸
				嘱託	鈴川哲夫
				嘱託	白木 亨

平成28年度整理体制

生涯学習・文化財課			埋蔵文化財センター		
船橋	課長	小柳和代	船橋	所長	増田 宏
	副課長	片桐季浩		次長	森 格也
船橋・生涯学習推進グループ	課長補佐	愛染由加朗	船橋課	課長(兼)	森 格也
	副主幹	松下由美子		副主幹	吉藤政好
文化財グループ	課長補佐(兼)	片桐季浩		主任	寺岡仁美
	主任文化財専門員	山下平重		主任	高木秀哉
	主任文化財専門員	乗松真也		主任	丸尾麻知子
			資料普及課	主任	西谷敬司
				主任	岩崎昌平
				課長	古野徹久
				主任文化財専門員	信里芳紀
				嘱託	大林真沙代
				嘱託	川井佐織
				嘱託	竹内悦子

平成29年度整理体制

生涯学習・文化財課			埋蔵文化財センター		
船橋	課長	小柳和代	船橋	所長	増田 宏
	副課長	片桐季浩		次長	森 格也
船橋・生涯学習推進グループ	課長補佐	中川聰明	船橋課	課長(兼)	森 格也
	副主幹	松下由美子		副主幹	吉藤政好
文化財グループ	課長補佐(兼)	片桐季浩		主任	高野徹行
	主任文化財専門員	信里芳紀		主任	丸尾麻知子
	主任文化財専門員	乗松真也	資料普及課	主任	岩崎昌平
				課長	古野徹久
				主任文化財専門員	誠木晋司
				嘱託	大山和子
				嘱託	加藤恵子
				嘱託	小林谷光子
				嘱託	佐々木博子
				嘱託	山本基公美

表2 調査・整理の体制

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

城泉遺跡は、香川県東部の湊川河口右岸の標高約5mの低地に立地している。この湊川は、阿讃山地から瀬戸内海に向かって流下する延長約18kmの小規模な河川である。近年天井化が進行しているが、上流の山間部を開析した後、下流部では東西の山地の間に矮小な谷底低地を形成する。城泉遺跡は、この谷底低地の河口付近の氾濫原面に立地しているが、ここでは谷底低地を中心にして遺跡周辺の地形分類を試みる。

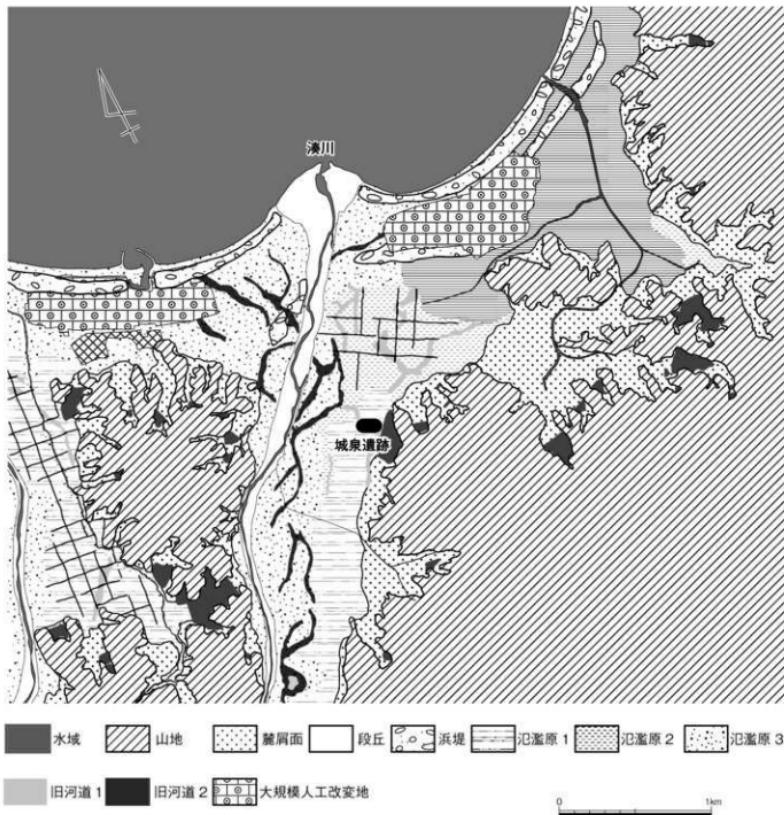


図3 地形分類

谷底低地は、山地裾を中心に麓層面・氾濫原面から構成されるが、大半が氾濫原面で占められる。氾濫原面は地割や小崖を境にして3つに区分でき、数か所に発達した自然堤防とみられる微高地が確認できる。氾濫原1は、湊川右岸の谷底低地南東部の麓層面に接してみられるもので、北部の氾濫原2との境には高さ約1mの小崖を伴っている。氾濫原2は、氾濫原1北側の湊川河口部に近い右岸にみられるもので、空中写真では蛇行する旧河道が暗示的にみられ、一部には条里型地割が分布している。氾濫原3は湊川両岸から河口部にかけて分布し、氾濫原1・2とは高さ約1~2mの崖で区切られる。現地表面には、旧河道とみられる蛇行した地割を伴う凹地が明瞭に観察され、自然堤防の発達が顕著にみられるのが特徴である。

これら麓層面・氾濫原面に加えて、湊川の河口部には浜堤・潟湖が確認できる。浜堤は、特に湊川右岸において発達し、現在も南北2列に分かれた明瞭な地形の高まりが確認できる。

湊川右岸の南側の浜堤の背面には、潟湖とみられる標高2m以下の低地が広がり、現在も排水用の人工的な小河川が掘削されている。この潟湖は浜堤の形成により生じたものと考えられるが、氾濫原面2・3によって埋積された可能性があり、形成当初は更に大規模なものであった可能性が高い。

以上の各地形面の形成年代を示す資料には、次のようなものがある。氾濫原1については、本書で報告する城泉遺跡や、成重遺跡（香川県教委他2005）等の調査成果から、弥生時代中期前葉まで形成され自然堤防上を中心に土地利用が開始された後、古代7世紀までの期間で埋積と平準化が進行したことが推定できる。氾濫原2についての年代推定資料は見られないが、配列からみて氾濫原1の形成より後出すると考えられることや、条里地割が分布することや城泉遺跡における条里型地割溝の年代から推定して、古代までに形成されていたことが想定できる。浜堤の年代は、湊川右岸の南側の浜堤上（松原遺跡、白鳥神社所在）から古墳時代初頭の製塙土器が採取されていることから、同時代までに形成されていたことが想定できる。北側の浜堤については形成年代を示す資料はみられない。

潟湖については、古代南海道をほぼ踏襲すると考えられる中世の「讚岐国往還」の湊川右岸の推定路が潟湖を避け南側の麓層面を東西に横切る形で想定されている（香川県教委1992）ことから、中世段階までは排水不良な湿地として近年まで耕地開発から取り残されていたと考えられる。

現状で年代決定資料の不足は否めないが、以上の資料を基にして城泉遺跡での調査所見との関係を整理する。城泉遺跡の遺構・遺物の中心を占める古墳時代中期後葉から7世紀代は、氾濫原1の埋没がほぼ完了し、主要な堆積域は河口部の氾濫原2へ移動していた。氾濫原2の埋積とともに潟湖も縮小したと考えられるため、古墳時代中期末葉から7世紀代には、遺跡の前面の近くまで潟湖が広がる環境にあったと考えられる。

これらの地形的な特性を踏まえたうえで、第3章以下の調査成果の説明を行いたい。

## 第2節 歴史的環境

縄文時代以前の考古資料は、本遺跡の河川堆積層下位に突審文土器が数点確認できる程度であり、全体の様相は不明な点が多い。弥生時代前期に至っても、本遺跡や小僧遺跡の河川堆積土中に弥生時代前中期の資料が数点確認できる程度（香川県埋文セ2000）であり、安定的に確認される状況ではない。前節で検討したように、本段階は谷底低地の氾濫原面1の形成期に相当することから、集落立地が低調であったと考えられる。弥生時代中期前半になると、谷底低地への進出が明確化する。成重遺跡で竪穴建物等が確認されている（香川県教委他2005）が、竪穴建物等の遺構分布は希薄であり、自然堤防上の限られたエリアに小規模な集落が営まれたと考えられる。弥生時代中期後半には成重遺跡に加えて麓層面や山地部の開析谷を立地基盤として池の奥遺跡（香川県教委他2003）や善門池西遺跡（香川県教委他2004）が出現する。これらの集落は、伐採斧・加工斧の保有率が高いのが特徴的であり、立地環境を活かした木材生産を専門的に行い、低地部の集落に搬出してきたと考えられる。

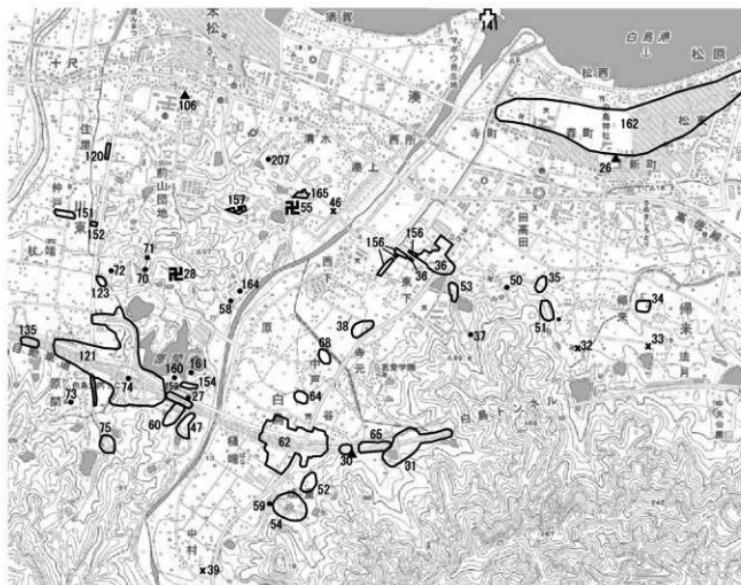


図4 周辺の遺跡（国土地理院 25000 分の1 地形図『三本松』の一部を加工して使用）

弥生時代後期には集落数が増加する。中期から継続する成重遺跡をはじめとして、原間遺跡（香川県教委他 2002）など、谷底低地の河川上流部に比較的大規模な集落が営まれ、その周間に住居遺跡（香川県教委他 1999）等の小規模集落が配置される景観となる。集落立地は、谷底低地の自然堤防上を基本とし、弥生時代中期後半期の池の奥遺跡のような山地谷部立地の集落は消滅する。また、山地丘陵部は、樋端遺跡（香川県教委他 2002）、寺前遺跡（東かがわ市教委 2010）で明らかになったような木棺墓群等が営まれており、低地の集落間の丘陵上は墓域として利用される。樋端遺跡では墳丘墓（白島町教委 2002）が構築されるなど、集団墓の中に壇主的な墳墓が登場てくる。充実した集落分布の状況と墳墓における階層構造に対応関係がみられるが、古墳時代前期初頭になると集落は消滅し、前期古墳が構築されることもない不透明な状況になる。

古墳時代前期初頭に遡る確実な前方後円墳は未確認であり、淡山下古墳（香川県埋文セ 2013）のような小規模な円墳が空白を埋める可能性があるが、それでも県内の他の地域に比べ古墳建築が低調であることには変わりがない。全長 38 m の大日山古墳（香川県教委 1984）は、墳形からみて古墳時代前期後半に下るものと考えられる。古墳時代前期前半期の集落は確認できず、再度出現するのは古墳時代前期後半を待たなければならない。

古墳時代前期後半の布留 3 式～4 式前半期は、城泉遺跡をはじめとして、成重遺跡、小僧遺跡、金毘羅山遺跡（香川県教委他 2000）等で遺物が出土し、遺構内容は不明な点が多いが集落形成が再び活発化した状況が窺える。これらの集落の土器様式はすべて布留様式に転換を完了しているものであり、本段階に再出現した新たな集落群と見なければならない。城泉遺跡では、昭和 41 年の国道 318 号線建設の際に遺物が多数発見

遺跡番号	種別	遺跡名	読み	時代
26	窓	須崎山窓跡	すざきやまかまあと	古代
27	古墳	神越古墳	かんごくふん	古墳
28	寺院	高松庵寺跡	たかまつはいじあと	古代
30	窓	谷窓跡・谷遺跡	たにかまあと・たにいせき	近世
31	集落跡	池の奥遺跡	いけのおくいせき	弥生
32	墓	(仮)1号墓	1こうぼ	近世
33	墓	(仮)2号墓	2こうぼ	中世
34	包含地	佛来遺跡	きらいいせき	
35	包含地	田高田北遺跡	たたかだきたいせき	古代
36	集落跡	城泉遺跡	しろいすみいせき	古墳・古代
37	包含地	田口池奥遺跡	たのくちあいおいせき	弥生
38	包含地	寺元遺跡	てらもといせき	弥生
39	墓	(仮)3号墓	3こうぼ	近世
46	墓	(仮)10号墓	10こうぼ	中世
47	包含地	神頃遺跡	かんごいせき	弥生・古墳
50	古墳	秋葉神社古墳	あきはじんじゃこふん	古墳
51	古墳	赤坂古墳群	あかさかこふんぐん	古墳
52	集落	成見北遺跡	なじみきたいせき	弥生
53	山城	白鳥城跡	しろとりじょうあと	中世
54	包含地	四房遺跡	しほういせき	弥生
55	寺院	白鳥庵寺跡	しらとりはいじあと	古代
58	古墳	北原廬の原古墳	きたはららんのほん	古墳
59	古墳	鞍音谷古墳(四房古墳)	くらねねぐらこふん(しほうこふん)	古墳
60	古墳	神頃桃山古墳	かんごももやまこふん	古墳
62	集落跡	成重遺跡	なりじゆいせき	弥生～中世
64	集落跡	中戸遺跡	ちゅうどいせき	古代～中世
65	集落跡	善門池西遺跡	ぜんもんちせいせき	弥生～中世
68	集落跡	鞍西遺跡	やぶにいせき	中世
70	古墳	大日山古墳	だいじゆうちやまこふん	古墳
71	古墳	大日山2号墳	だいじゆうちやま2こうふん	古墳
72	古墳	大日山3号墳	だいじゆうちやま3こうふん	古墳
73	古墳	原間6号墳	わらま6こうふん	古墳
74	古墳	原間7号墳	わらま7こうふん	古墳
75	包含地	幸代池西遺跡	こうだいじわいせき	
106	窓	眼窓八の窓跡	さんがまどうはのまのかまと	近世
120	集落跡	住屋遺跡	すみやいせき	弥生～古墳
121	集落跡	原間遺跡	わらまいせき	弥生～古代
123	集落跡	小僧遺跡	こぞういせき	弥生～中世
135	集落跡	西谷遺跡	にしやだいせき	弥生～中世
141	城館	漆川猿煙塚跡	みみなわのるしぶあと	近世
151	集落	仲戸遺跡	なかどいせき	古代
152	集落	仲戸東遺跡	なかとひがいせき	弥生
154	墓	寺前遺跡	てらまえいせき	弥生～古墳
156	集落	田中遺跡	たなかいせき	中世
157	古墳	湊山下古墳	みどりやまたしたこふん	古墳
159	墳墓	埴端遺跡	といはないせき	弥生～古墳
160	墳墓	埴端塚墓	といはなふんきゅうぼ	弥生～古墳
161	古墳	神頃5号墳	かんご5こうふん	古墳
162	包含地	松原遺跡	まつばらいいせき	弥生～古墳
164	寺院	埴端廬寺跡	といはなはいじあと	中世
165	集落跡	山下岡前遺跡	やましたおかまえいせき	古墳・古代
207	古墳	岡前地神社古墳	おかまえじんじゃこふん	古墳

表3 周辺の埋蔵文化財包蔵

されており（白鳥町史編集委員会 1985）、出土遺物の量等から工事範囲の周辺が集落でも中心に近い範囲であったと考えられる。

集落の再出現とともに古墳建築も活発化していく。原間遺跡の東西の丘陵では東丘陵のTK216型式併行期の原間6号墳の築造を契機として、古墳時代後前期前葉のMT15型式併行期の原間10号墳まで、11基が連続して築造される。これらは円墳を基調としているが、中でも最初期の原間6号墳は全長約30mを測る中型円墳であり、内部主体に木櫛を採用している（香川県教委他 2002）。副葬品の三累環頭太刀や短甲等を合わせれば、渡來系古墳と推定される。

これら原間古墳群の他に、最近周知された全長約90mの前方後円墳である岡前地神社古墳がある。現時点

で細かな築造時期を絞り込むことは困難であるが、古墳時代前期末葉～中期の時間幅に収まると考えられ、集落の再出現と原間 6 号墳の築造との関係性が注目される。

古墳時代後期から終末期は原間 1 号墳（香川県教委 1984）の他、数基の横穴式石室を内部主体にもつ古墳が知られている。築造時期が知られている主な古墳として、原間 2 号墳（TK43 型式併行期）、原間 1 号墳（TK209 型式併行期）を挙げることが出来るが、大型の横穴式石室の築造は確認できない。古墳時代後期前葉以前の時期との差異が著しく、何らかの地域の再編があったことが想定される。

古代の城泉遺跡及びその周辺は、『和名抄』によると旧大内郡白鳥郷、入野郷、与田郷に含まれることになる。遺称地名からみて、湊川河口右岸の城泉遺跡は白鳥郷に含まれると考えられ、推定郷域は遺跡北部に遺存し真北から東へ約 30° 振れる条里地割の分布範囲とも整合的みえる。その一方で、城泉遺跡から湊川を挟んで対岸の湊川左岸の近接した位置にあり、8 世紀初頭に創建されたと考えられる白島廃寺の伽藍主軸は、真北から 13° 西偏するもので、前山丘陵を挟んで西側の旧大内郡西部の入野・与田郷の条里地割の方向に合致する（香川県埋文 2013）。讃岐国の条里型地割は駅路である南海道を基準とする（金田 1988）ことから、駅路との関係も無視することはできないが、矮小な谷底低地内の河川を挟むエリアでの阡陌線及びそれに沿する寺院主軸線の相違は注意しておく必要がある。

駅路である南海道は、中世の讃岐国往還を参考にすると、阿讃国境の大坂峠を越えて引田郷に入った後、本章第 1 節でみた潟湖を避ける形で城泉遺跡北側を東へ進み、湊川を渡河した後、前山丘陵の北側を更に西へ抜け、旧大内郡と寒川郡境の田面峠へ向かう。旧大内郡西部の入野・与田郷の条里地割には東西方向の幅約 10 m の余刺帯（片桐 2003）が確認できることや、田面峠に近いこの条里余刺帯の延長線上に位置する坪井遺跡において道路遺構が確認されている（香川県教委他 2002）。今後は、城泉遺跡北側の条里型地割が残るエリアを中心とした旧大内郡東部での検証が必要となってこよう。城泉遺跡の出土資料に荷札木簡と見られる資料が存在することを重視すれば、遺跡北側に推定される南海道に近接した位置に郡家等の官衙が所在していることも否定できない。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序と遺構検出面

現道及び現水路との関係から、調査範囲全体を1～9区に大別し調査を行った。また、都合上、調査区を①・②のように分割して調査を行った箇所も存在する。ここでは、調査範囲全域の堆積状況を、1～4区までの東西方向と、5・4・8区の南北方向の土層断面を使用して説明を加える。

#### 1. 1～4区断面

現地表面の宅地造成土、耕作土の下は4～6層に細分される灰色系の旧耕作土（1区3～6層等）が累積してみられた後、遺構検出面に至る。灰色系の旧耕作土は、8世紀から中世後半の遺物を包含していることから、遺構検出面は一定程度の削平を受けていると考えられる。遺構検出面の標高は約4.7mであり、山側となる4区東部では5mに上昇するものの、概ね平坦となっている。

遺構検出面は全て河川堆積物で構成されている。河川堆積物は堆積構造や粒径から上・中・下最下層に大別して捉えることができる。最下層はやや絞まりのある灰黄色シルトであり、層内に微細なラミナが認められる。掘削深度の関係から1区のみで確認しているが、縄文時代晩期末葉の突帶文土器を包含している（図11）。下層は暗灰色系粘土を主体とした湿地性の堆積物であり、弥生時代後期の遺物を含む。縄文時代晩期末葉までの堆積の後、旧河道の主流路が移動し、弥生時代後期を中心とした時期には湿地状態の環境を呈していたと考えられる。中層は、層相から上位と下位に区分できる。中層下位は灰色系の粘土～細粒砂が主体であり、上方に向かって粗粒化する傾向を示す。また、途中に炭化物の細粒を帶状に含む層位や、ラミナの発達した粗砂層が認められることから、一連の堆積ではなく途中に乾燥状態を挟みながら堆積したものと考えられる。古墳時代前期後半～末葉の土師器や古墳時代中期後葉～末葉の須恵器・土師器が含まれている（図10.11）。中層上位は、東部の4・7区を中心に確認しており、広範圍に中層下位が堆積した際に形成された凹地部分に相当すると考えられ、この凹地をSR4001・7001として調査を行った。暗灰色系の細砂～シルトを基本とし、極細砂と微粒炭化物によるラミナが発達する。凹地が乾燥と雨水等により漸移的に埋積された際の堆積層と考えられ、古墳時代中期後葉～末葉の遺物を多く含む。SR4001・7001とした凹地は、中層上位層による埋積が進んだ後、上層下位として区分する7世紀中葉の流路によって再び開析される。その後8世紀までに漸移的な埋積が進み、9世紀後葉～10世紀前葉には標準化していく。SR4001・7001については次節で詳述する。

#### 2. 5・4・8区断面

5区①から4区③までは、1～4区から続く河川堆積層が確認できる。5区①や4区③では下層である弥生時代後期の湿地性物がみられ、その上位を中層とした古墳時代前期から中期後葉の河川堆積物が覆う。4区②から8区は、遺跡東側の山地に付着し比較的安定した麓層面となるが、この部分には中層とした河川堆積層の下位に古墳前期の遺物包含層がみられる。この遺物包含層は、遺構埋土の累積と考えられるため、安定した麓層面に居住遺構が営まれたことを示している。8区付近は微高地であったと考えられる。

以上の遺構検出面下位の河川堆積物の動向は、第2章第1節で触れた本遺跡周辺の氾濫原面の形成年代を考える際に有効な資料と成り得る。

図10から図11には、4区SR4001・7区SR7001を除く遺構検出面下位の河川堆積物からの出土遺物を掲載している。1は1区上層から出土した須恵器蓋杯で、7世紀後葉に比定される。2～18は1区中層から出土

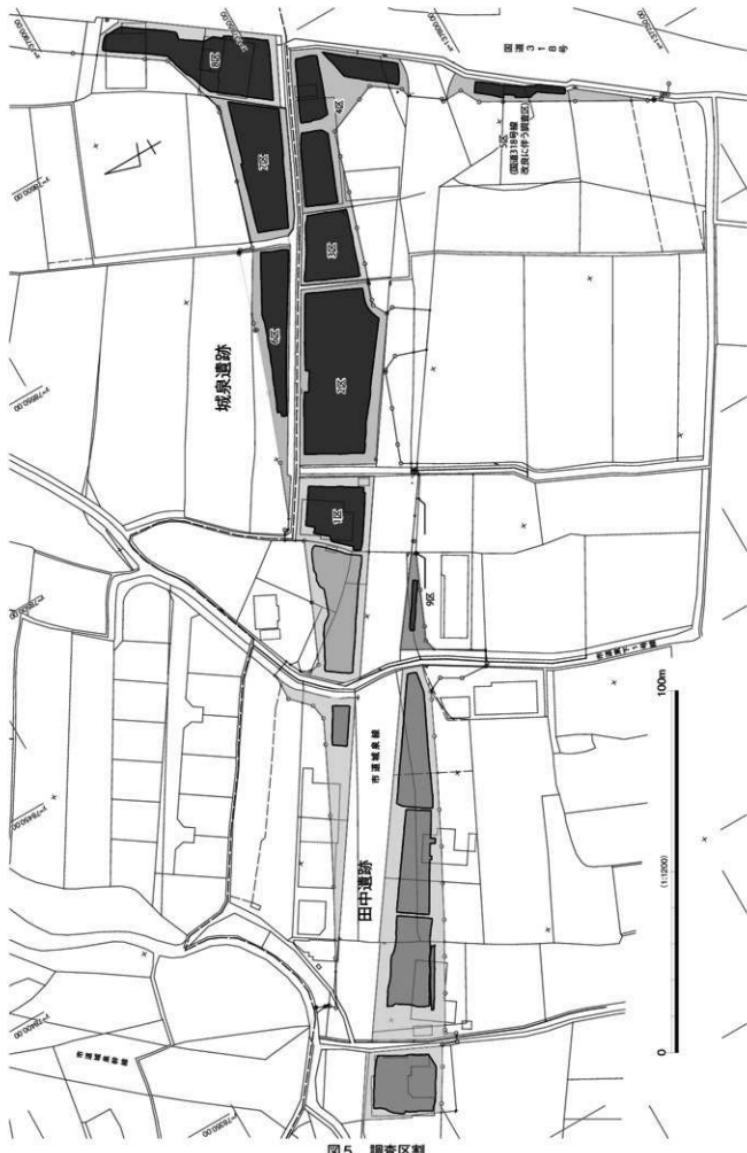


図5 調査区割

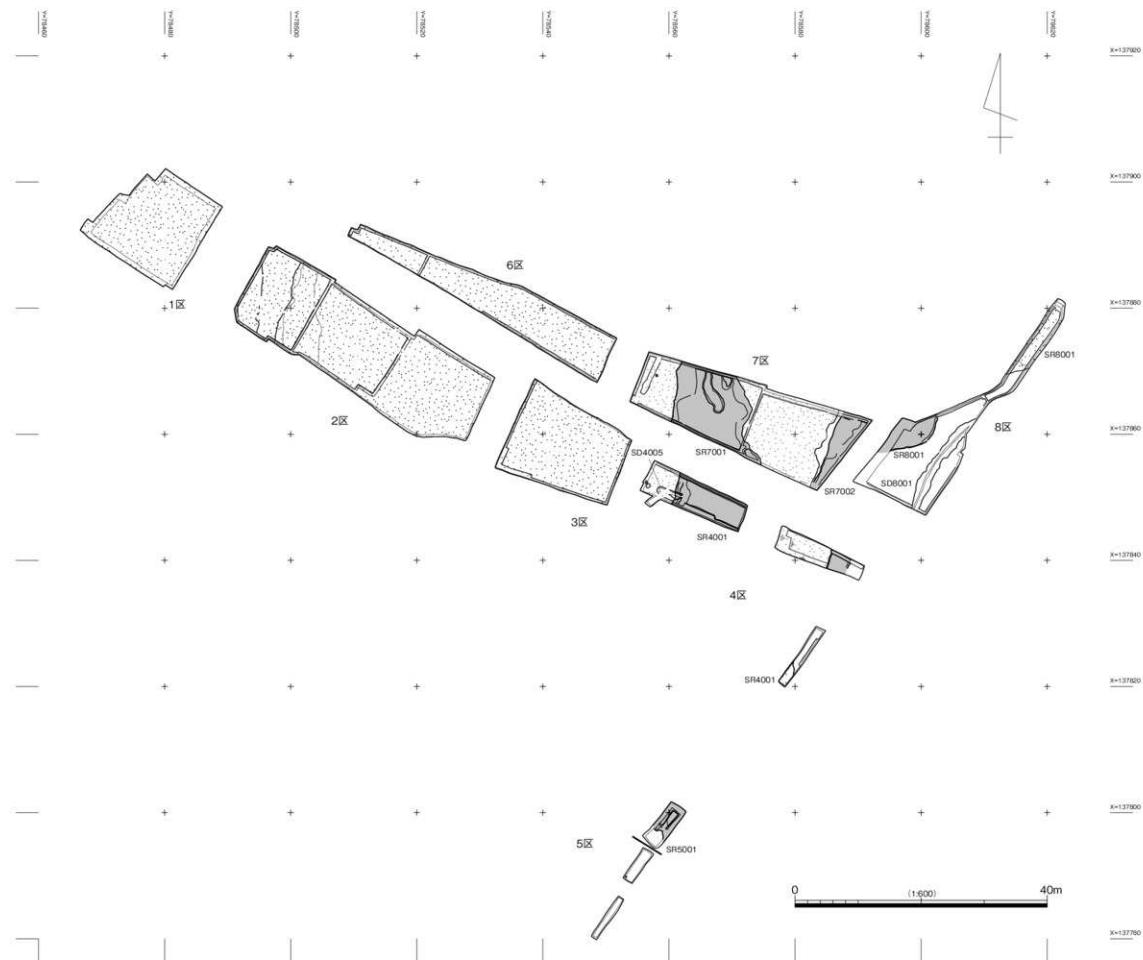


図6 第2面全体図(統合1/600)

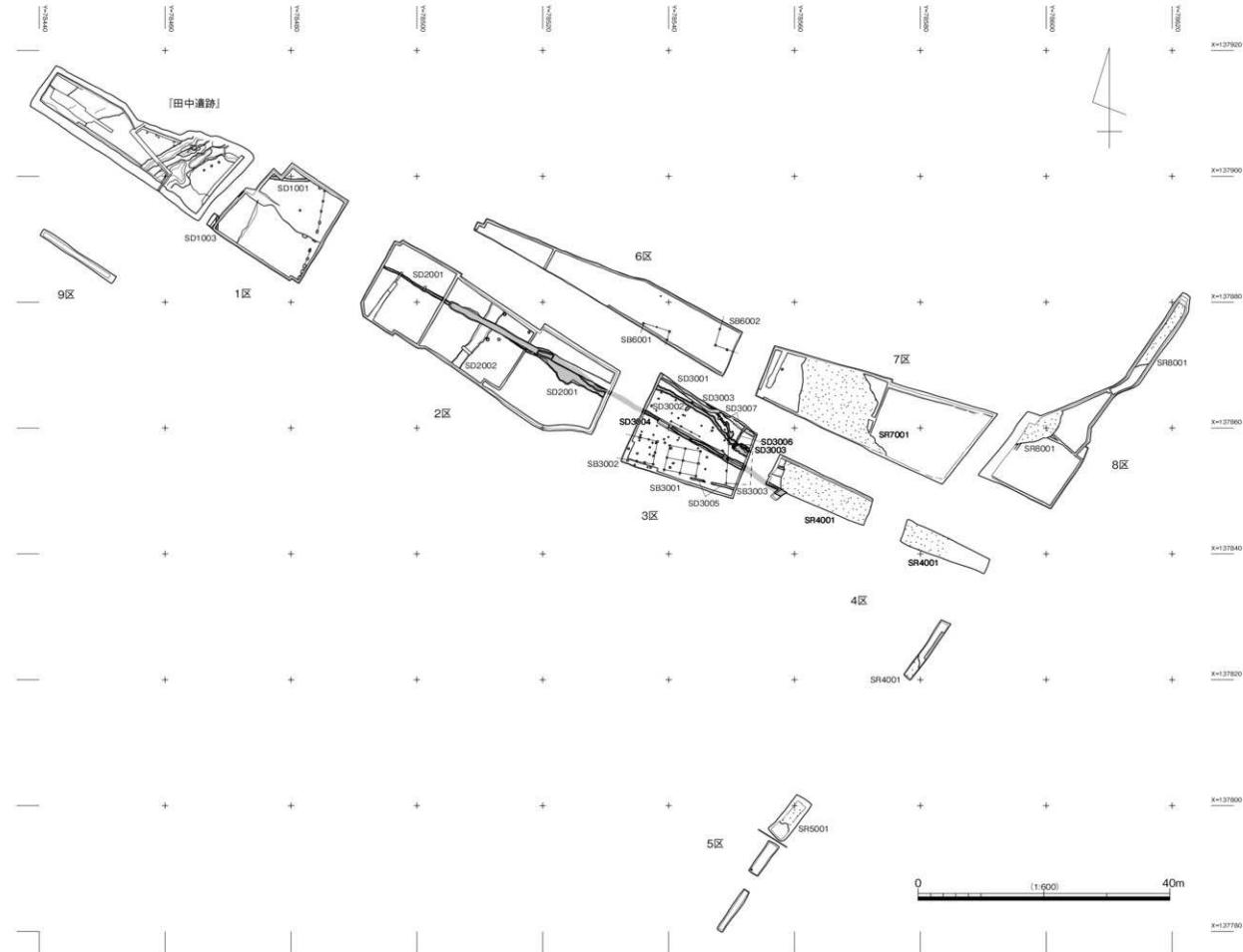


図7 第1面全体図(統合1/600)

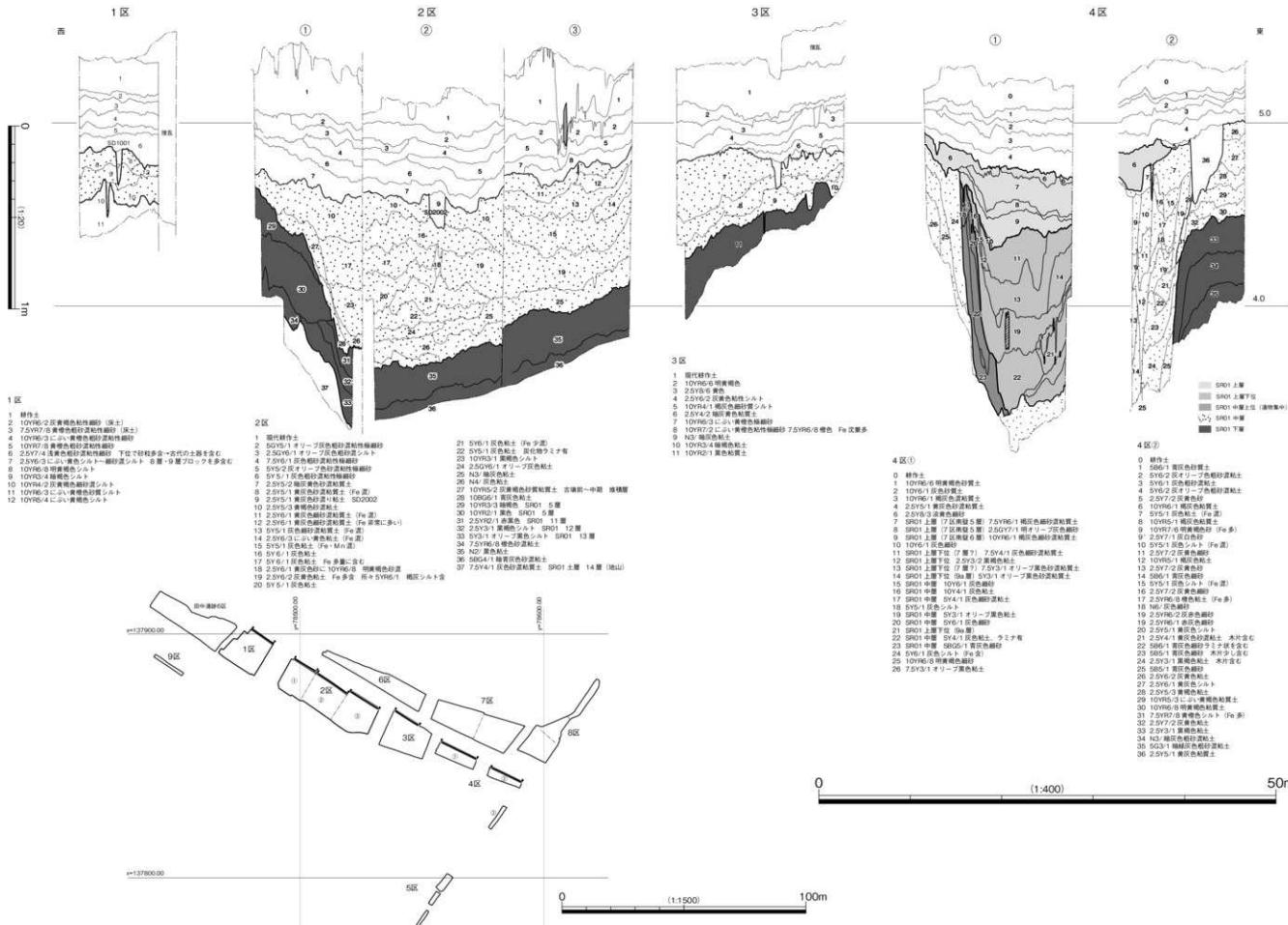


図8 1～4区北壁断面

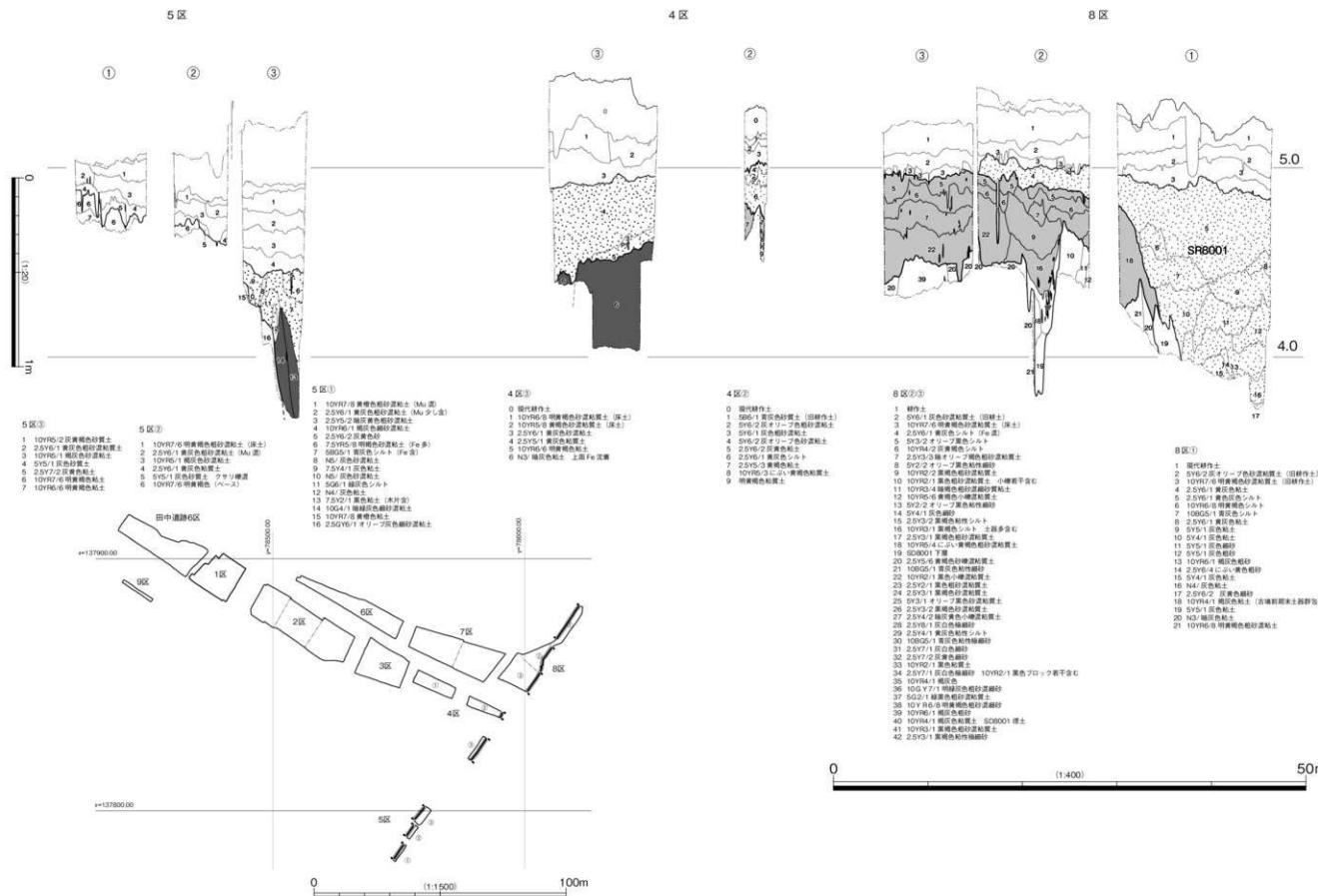


図9 5・4・8区南北断面

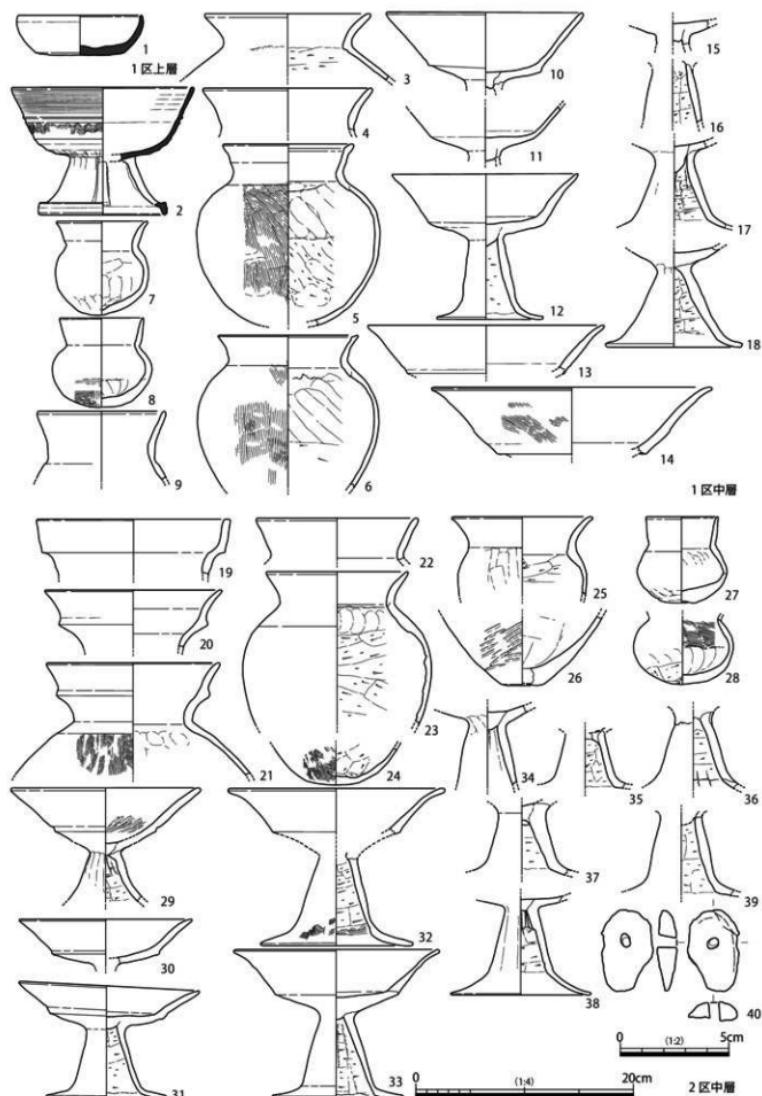


図 10 1・2区下位河川堆積層出土物

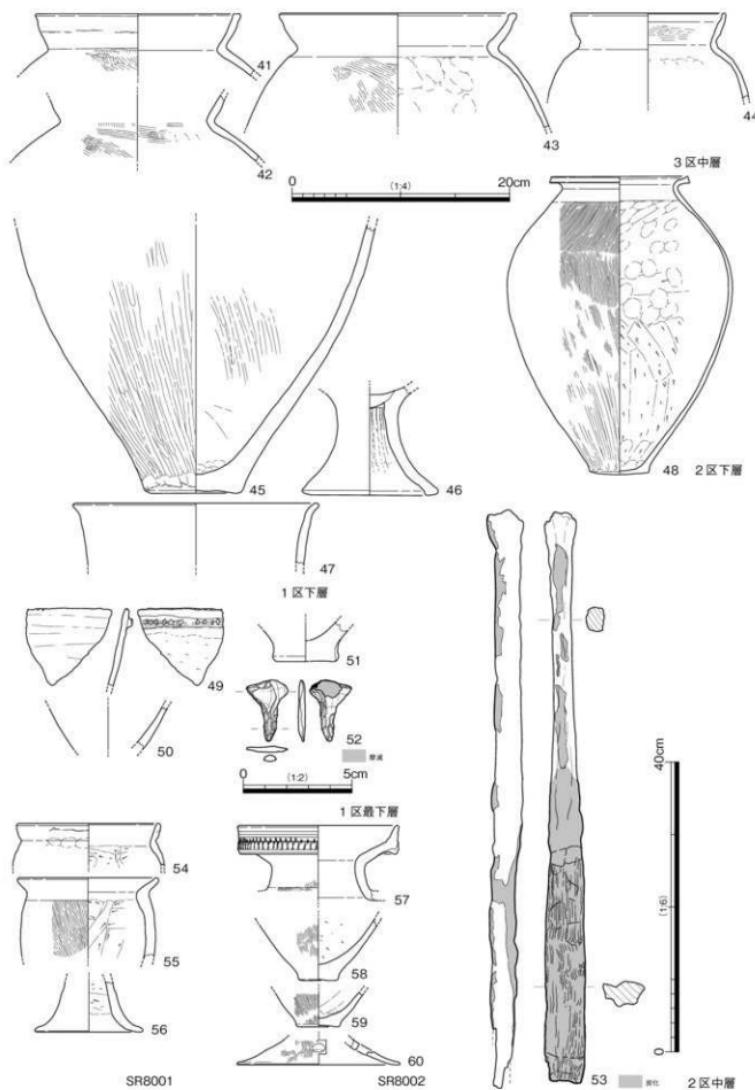


図 11 1・2・3区下位河川堆積層出土遺物

した資料群である。2は須恵器無蓋高杯で、TK23～47型式併行期に比定される。7.8は土師器小型丸底壺。形態からみて、5世紀前半の同形式最末期の所産とみられる。9は土師器直口壺。3～6は土師器甕であり、形態差が著しい。10～18は土師器高杯。13.14は法量からみて大型高杯となる。これらの須恵器・土師器の資料群は、須恵器は5世紀後半に土師器は4世紀末から5世紀前半に比定されることから、数回に分かれる河川堆積によって混在したものと考えられる。

19～40は2区中層からの資料群。19～21は土師器二重口縁壺。20.21は形態からみて4世紀後半の資料とみられる。22～24は土師器甕、25は異形の甕である。26は弥生土器甕であり底部形態から後期後半期の所産であろう。27.28土師器小型丸底壺。28は胴部外面下にケズリ調整を残し、4世紀後半でも古相に位置付けられる。

29～39は土師器高杯。形態から見て4世紀後半の中での年代差を含んでいる。40は滑石製の有孔の石製品であり、周縁と図左の一面に磨滅が進むが、孔径や残存法量からみて勾玉の残欠であると考えられる。

41～44は3区中層からやまとまって出土した土師器甕である。41.43の口縁端部上面や44の口縁部形態からみて、5世紀前半に比定される。

45～48は2区下層から出土した資料である。45は弥生土器甕であり、底部及び胴部下半の形態からみて弥生時代中期前葉とみられる。46は弥生土器台付鉢であり、弥生時代中期中葉の所産である。48は弥生土器甕で、胎土中に雲母・角閃石を多く含む香東川下流域産であり、弥生時代後期中葉に比定される。

47は、1区下層から出土した弥生土器甕であり、弥生時代前期前葉の資料と考えられる。

49～52は、1区最下層から出土した資料である。49.50は繩文土器深鉢であり、49は口縁部からやや下がった位置に1条の突帯を施し、口唇部と突帯上に刻目を施す。底部片50.51は表面の磨滅が進むが、49の突帯文土器と同一個体となる可能性が高い。52はサヌカイト製の石錐である。

54～56は層序対比から1～4・7区の中層に対応するSR8001から出土した資料群である。54は土師器甕であり、4世紀後半に比定される。55は弥生土器甕、56は土師器高杯である。57～60は同じく中層に対比される8区SR8002から出土した資料。57は弥生土器複合口縁壺であり、後期後半の資料。58.59は弥生土器甕底部片で、後期後半でも古相に比定される。60は弥生土器高杯の脚部片。

53は、2区中層から出土したヒノキの棒状材である。器表面の腐食が進むが、一部に加工痕を認め全体が炭化している。

## 第2節 古代以前の遺構・遺物

前節で触れたように、古代以前は山地裾部の麓表面となる8区以外の調査区は、頻繁に河川堆積の影響をうける氾濫原面に特有の不安定な土地条件となる。

本節では、調査区全体の土地利用や変遷に深くかかわるSR4001・7001を中心にして、8区麓表面上の灌漑水路等の調査成果の説明を行う。SR4001・7001は氾濫原面における河川堆積の最終段階であり、古墳時代中期後葉から末葉、7世紀中葉の遺物が多く出土した。特に、準構造船の部材や建築部材、荷札木筒とみられる木器資料が注目される。

### 4区旧河道 SR4001

4区SR4001は、古代以降の遺構面を形成する河川堆積の最終埋没層に相当する。別の略号を与えていたが7区SR7001と一連の堆積ユニットとなると考えられる。前述した1～4・7区の堆積層区分を詳述しながら説明を加える。

最上層は、灰色系シルト～粘土を基本とし、中位に8層とするラミナが認められる細砂を介在している。

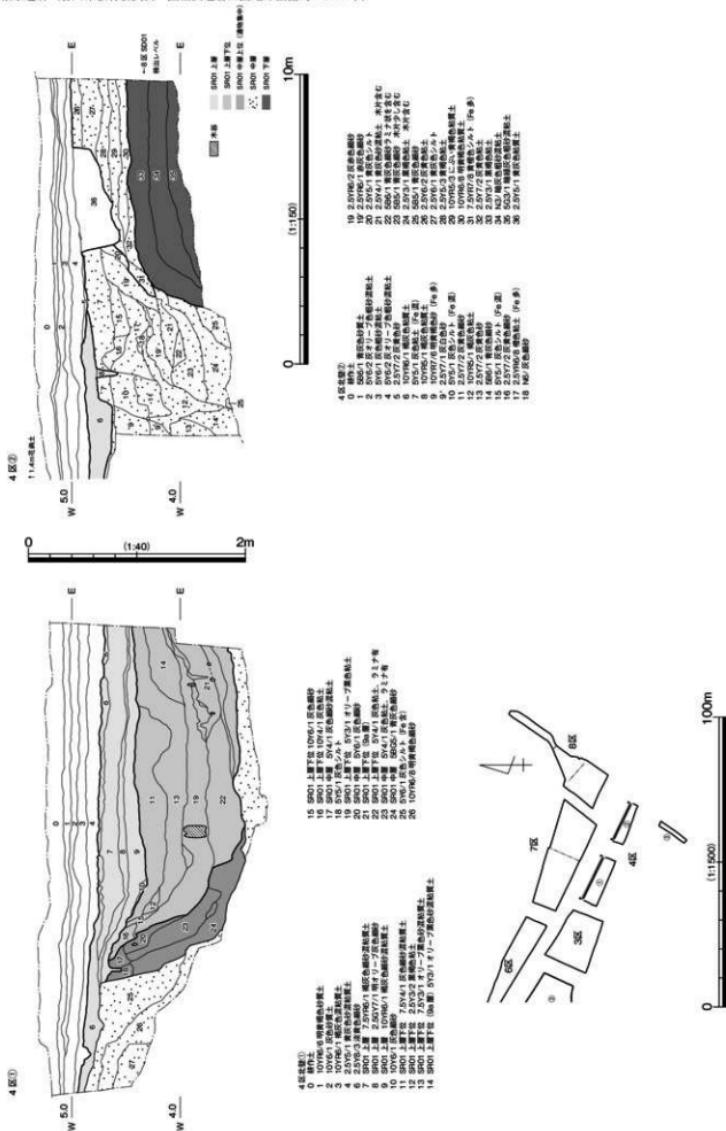


图 12 4 区北壁断面

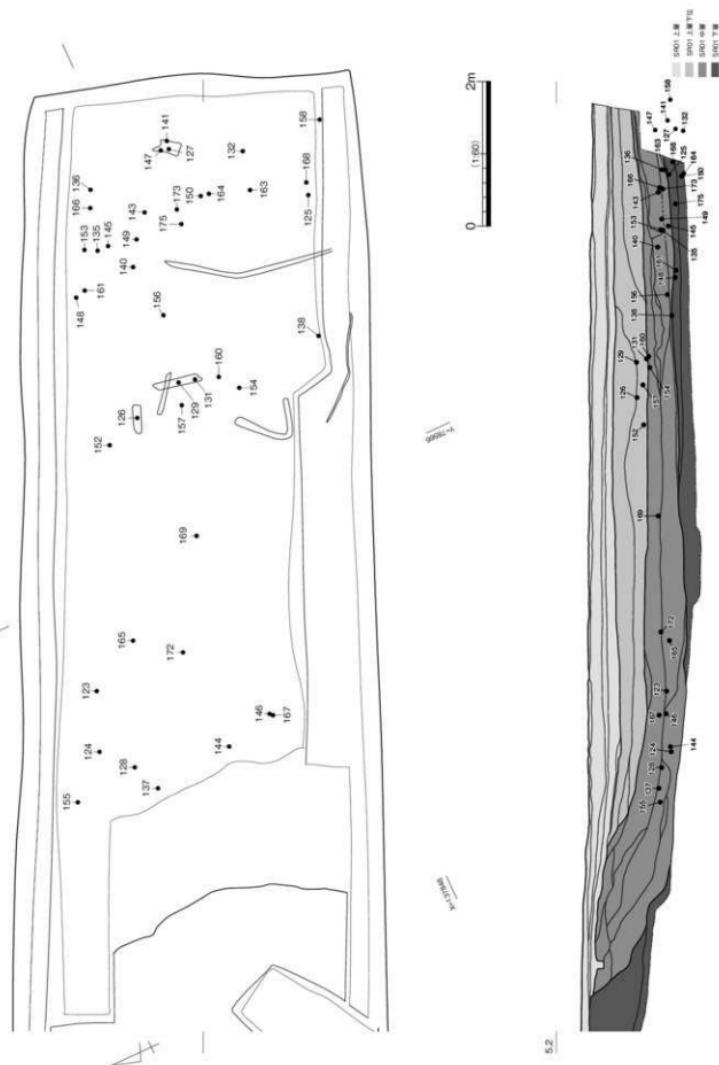


图 13 4 区 SR4001 遗物分布(上层下位)

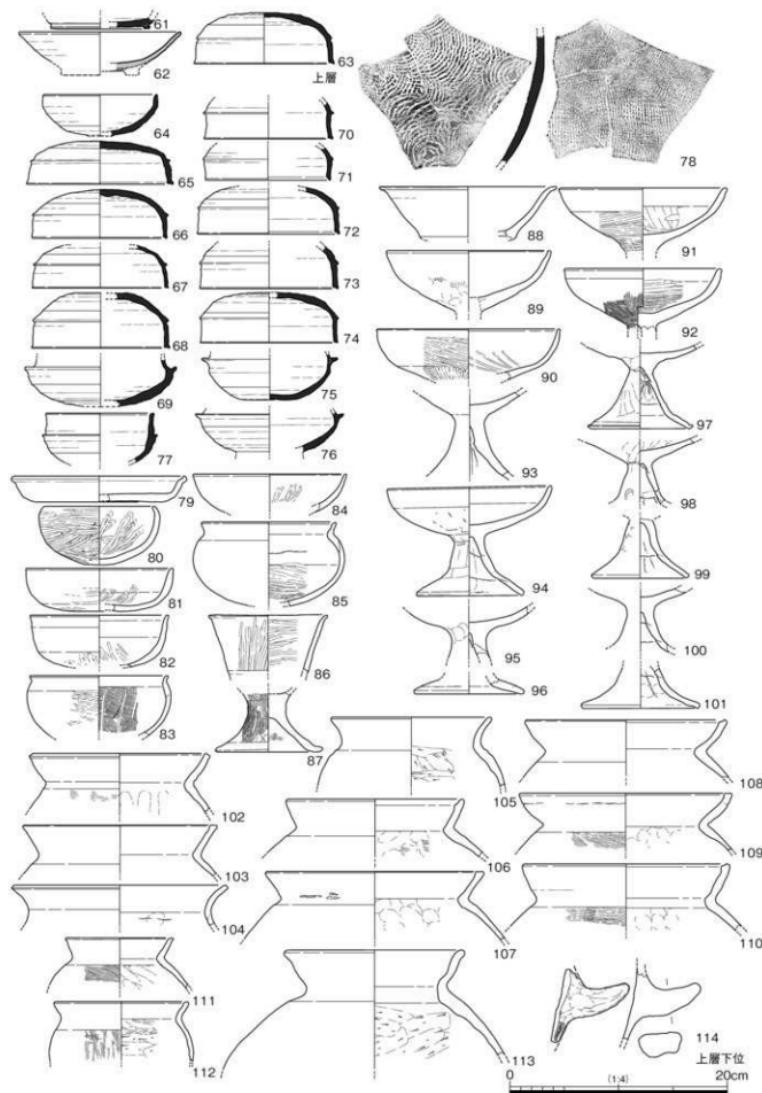


図14 4区 SR4001 上層・上層下位出土遺物

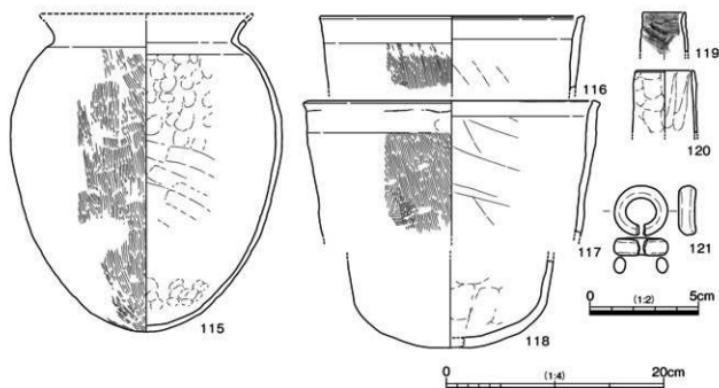


図 15 4 区 SR4001 上層下位出土遺物

灰色系のシルト～粘土には、ラミナが認められず層内に細かな偽縞を多く含むことから、人的に擾乱を受けた耕作土と考えることができる。8 層とする細砂層は耕作地として利用されていた途中の洪水砂層と考えられるが、上部を 7 層による擾乱を受けていたため、堆積時の層厚を留めていない。図 14-61～63 に示す遺物の年代観から、8 世紀から 10 世紀にかけての水田層であると考えられる。

上層下位は、下位にラミナが顕著に発達する灰色粗砂、中位から上位はラミナが認められる灰色～黒色シルト～粘土で構成され、上方細粒化が認められるため一連の堆積ユニットと捉えられる。主に中位から木製品が多く含まれており、7 世紀中葉の須恵器を伴う。終息しつつあった河川堆積の最終段階の流路と考えられる。

中層は、前述したように古墳時代前期から古墳時代中期末葉までの河川堆積層であり、上位・下位に大別することができる。4 区①の西端、4 区②の多くが中層下位堆積物で占められ、灰色系の細砂～シルトを基調とし、上方細粒化が認められる。また、上層下位とした 7 世紀中葉の流路は、中層を開析しているが、4 区①西部ではその際に削り残された中層上位層が遺存しており、5 世紀末葉の須恵器・土師器・木器等の考古資料が多く含まれていた。中層上位は、暗灰色系の細砂～シルトを基本とし、極細砂と微粒炭化物によるラミナが発達する。中層下位堆積完了後に、乾燥と雨水等による漸移的な埋積が繰り返された層と考えられる。

下層は暗灰色系の粘土層であり、前述した 1 区から 4 区の基本層序で中層とした単位に相当する。本調査区では考古資料が出土していないが、層序対比による 2 区等の所見から、弥生時代中期から後期にかけて沼沢地となった段階の堆積物と考えられる。

図 14-61～63 は上層、図 14-64～21 は上層下位、図 22～26 は中層からの出土遺物である。

62 は緑釉陶器柄であり、京都近郊産の可能性が高い。一方で、9 世紀前葉の須恵器杯 (61) との年代差は上層の耕作地としての利用期間を示すものと考えられる。

64～75 は須恵器蓋杯。64 は 7 世紀中葉 (TK217 型式併行期) の資料であるが、古相を示す 75 以外の他の資料は、5 世紀後葉 (TK23 型式併行期)～未葉 (TK47 型式併行期) の年代を示す。本層位の堆積年代を示すのは 64 の須恵器蓋杯であり、他の資料は中層からの混入資料と考えられる。

須恵器 (77) は口径からみて、取手付椀と考えられる。79 は土師質土器皿で、内外面にベンガラとみられ

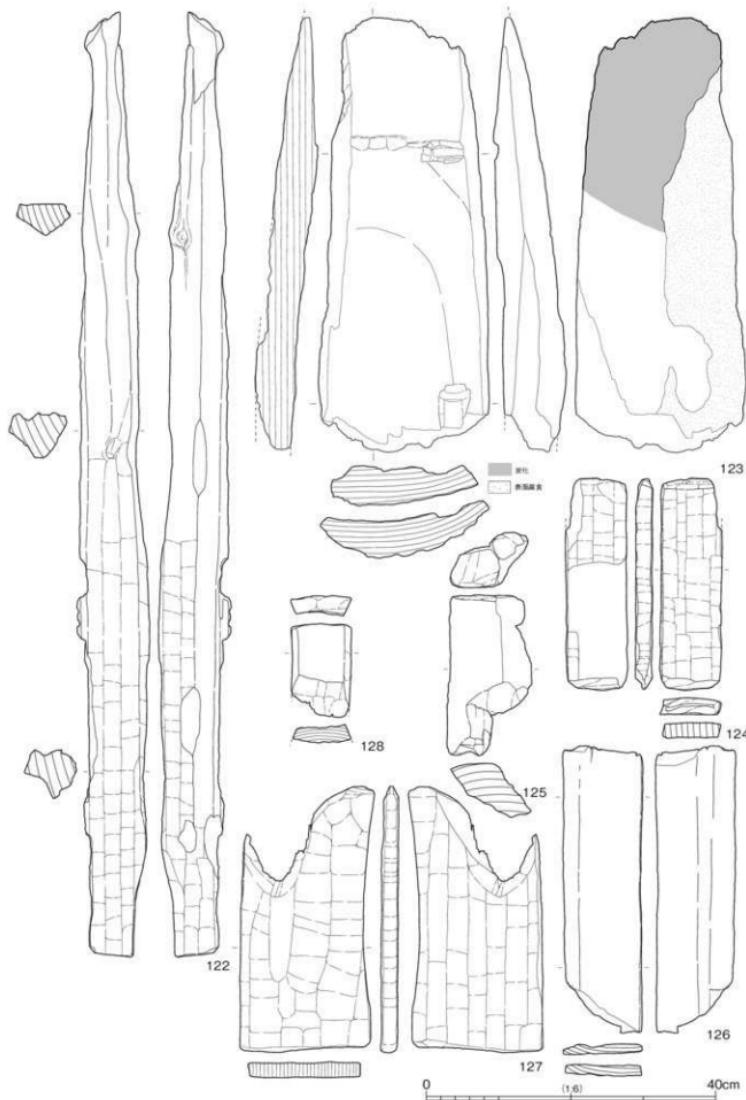


図16 4区 SR4001 上層下位出土遺物(木器)その1

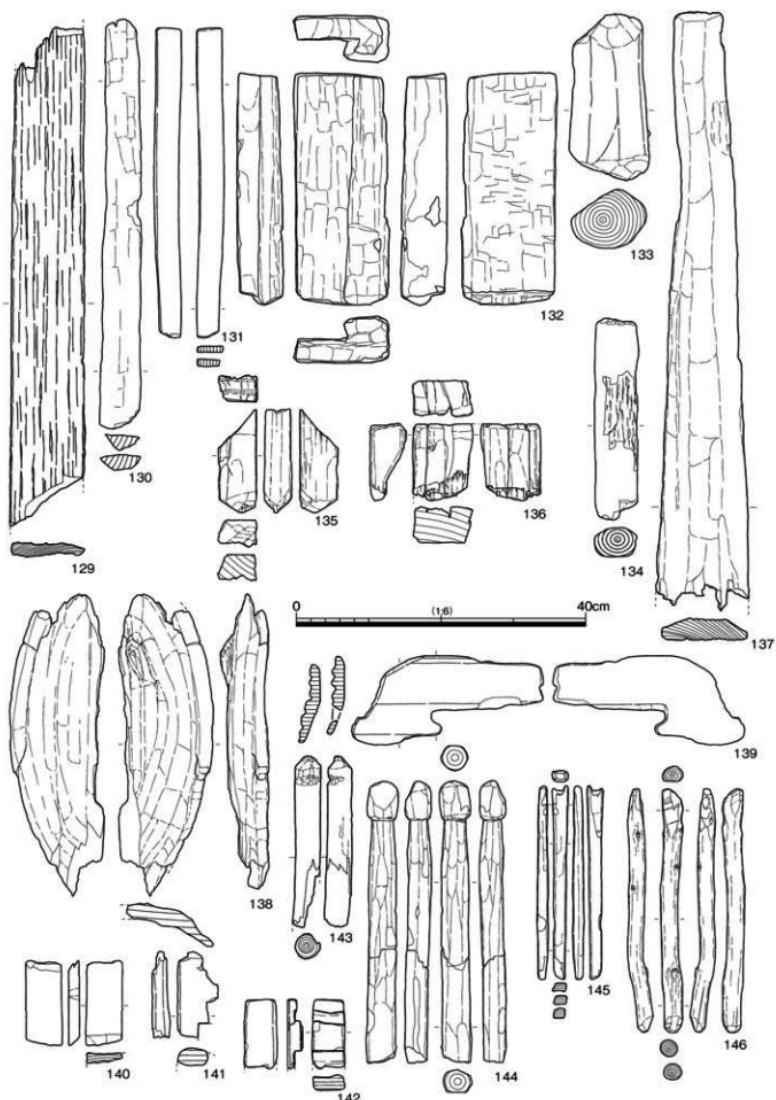


図17 4区 SR4001 上層下位出土遺物(木器)その2

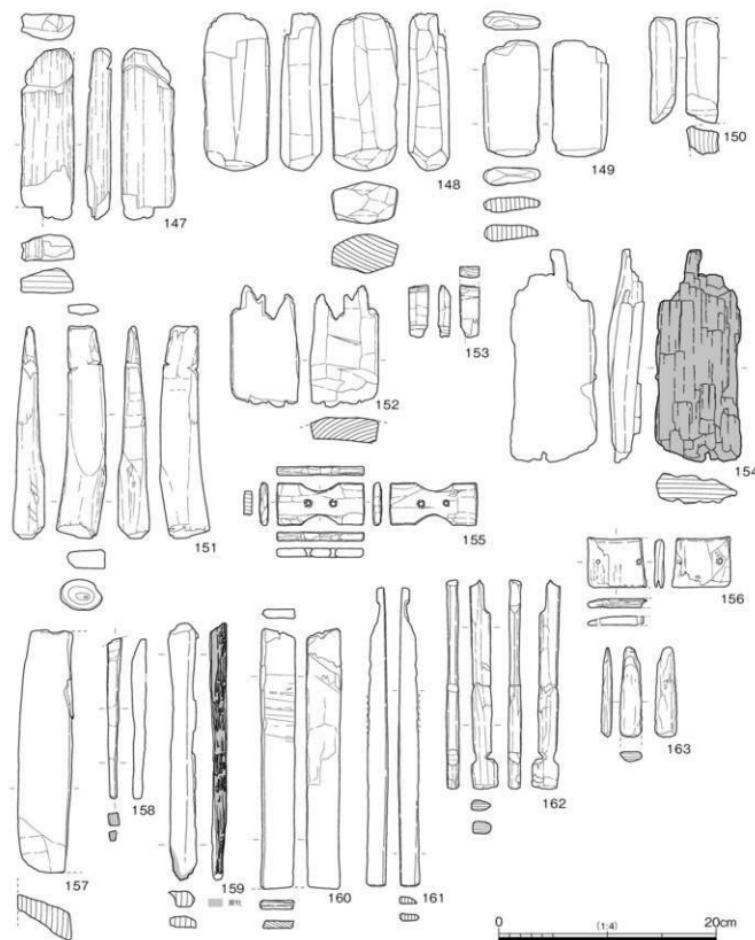


図18 4区 SR4001 上層下位出土遺物(木器) その3

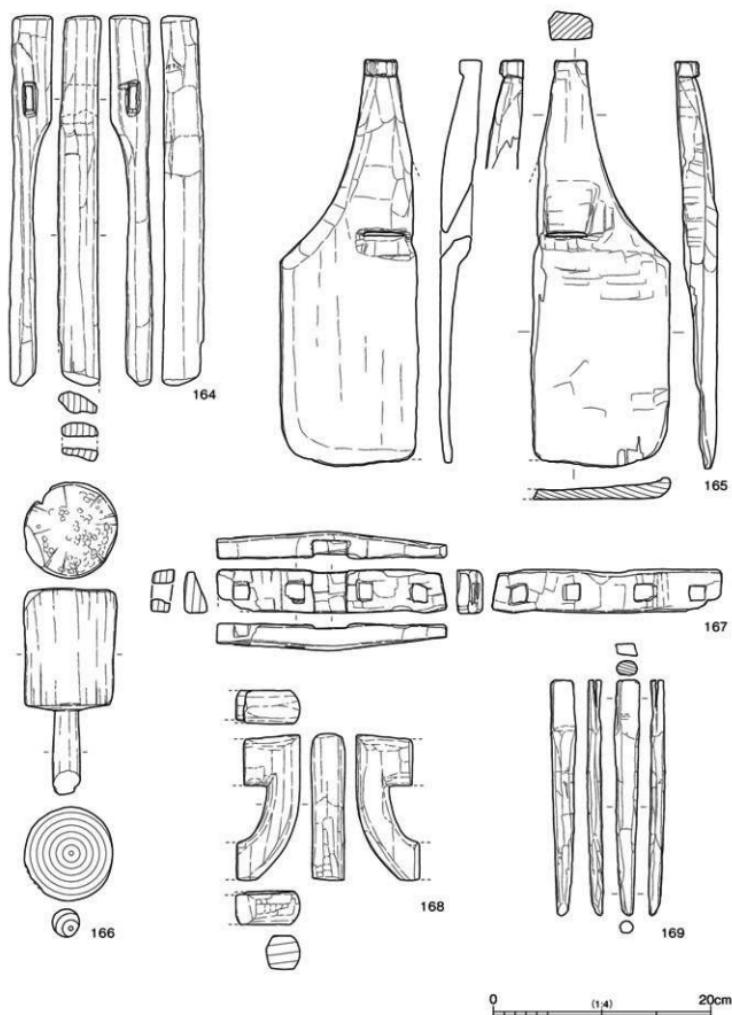


図19 4区 SR4001 上層下位出土遺物(木器)その4

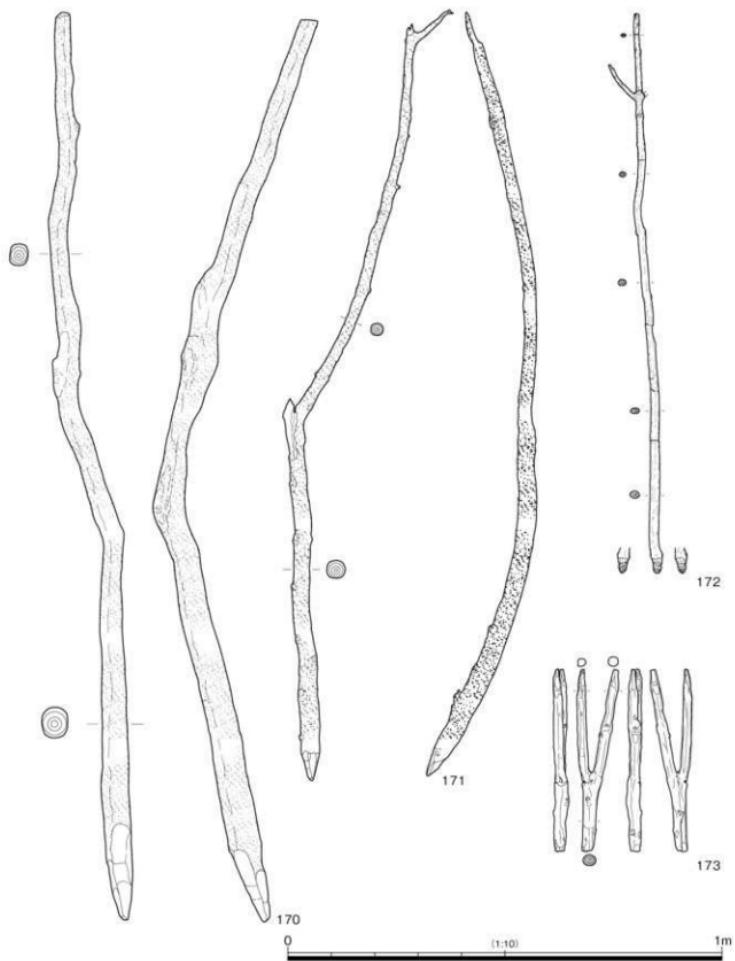


図20 4区 SR4001 上層下位出土遺物(木器)その5

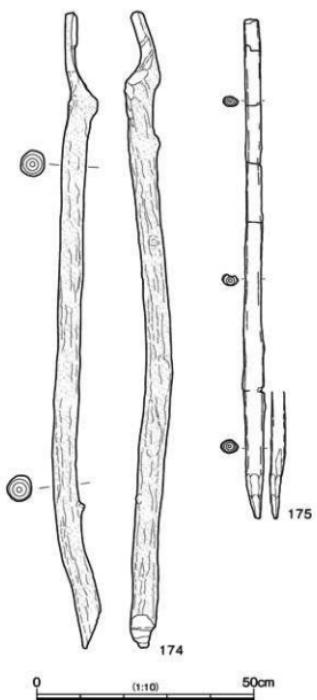


図21 4区 SR4001 上層下位出土遺物(木器) その6

上部のダボ跡と構状の加工痕を継板の取り付け部とみて、準構造船の船首から割り舟部にかけての船底部材と考える。側面の舷側板との接合の為の段つき加工部が存在しないことになるが、転用時に削り落とされたと解釈したい。樹種はマツ科モミ属である。

124はコナラ属アカガシ亜属の板材。125は用途不明の部材である。126はヒノキ科の偏平な板材、127は「V」の字状の切り込み作出するヒノキの不明部材である。128はヒノキの小型板材である。

129はヒノキの大型部材で、法量からみて建築部材と考えられる。130は全体に炭化が認められる板材で、樹種はツブライジである。131は偏平な板材。132は「L」字状に段部を作り出す厚みのある部材であり、台輪等の建築材の再加工品と考えられる。樹種はアカガシ亜属である。133はコナラ属アカガシ亜属の芯持材で、柱材の転用である可能性が高い。

134は加工棒。135は槽の破片とみられるが、腐食が進んでいる。樹種はマツ科モミ属である。139は不明部材であり樹種はクリ。141.142は不明部材で、一部に方形の切り込みや削り込み加工が確認できる。143.144.146は加工棒。

145は上端に切り込みを持つ小型の棒状材である。147は加工棒。148～150は板材、151は先端部を偏平

る赤色顔料が付着し、形態からみて8世紀中葉に比定される。他の上層下位出土資料に比べ年代が下るが、8世紀代の資料は本資料1点のみであり、上層からの混入品と考えたい。80～85は土師器甕であり、5世紀後葉～末葉の須恵器群に伴う資料と考えられる。86は土師器直口壺、87は弥生土器台付鉢の脚部片である。

88～101は土師器高杯であり、88を除いて椀型高杯と考えられる。5世紀後葉～末葉の資料であろう。102～113・115は土師器甕。全体形状を窺い知ることができる資料に乏しいが、小型甕(111.112)を除いて、115のような長胴化が完了する5世紀後葉～末葉の資料群であろう。114.116.117は土師器甕。114の甕取手は挿入法によって作出されている。118は土師器鉢と考えられるが、検討の余地がある。119.120は製塙土器であり、タタキ技法の有無があるけれども、小型丸底I式(広瀬1978)と考えられる。県内資料で確実な小型丸底I式は初例となる。両者とも胎土中に砂粒を多く含まず、灰色系の色調をもっている。121は銅地鍍金の耳環である。本層出土資料の内、7世紀中葉の土器群に伴う資料と考えられる。

図16～21の木器は上層下位として区分した4区①西・東部の2ヶ所にややまとまった状態で出土した。帰属時期は7世紀中葉と考えられるが、中層(5世紀後葉～末葉)の資料が混在している可能性は排除できない。122はスダジイの約1.3mを測る大型材であり、法量からみて建築部材である可能性が高い。

123は厚みのある大型部材であり、一部にダボ跡と考えられる方形の僅みが2か所確認できる。図上部のダボ跡を境にして上位は平坦面、下位は削り抜きによる僅み部が作出され、上部ダボ跡から横方向に構状の加工痕がみられる。

124はヒノキの大型部材で、法量からみて建築部材と考えられる。130は全体に炭化が認められる板材で、樹種はツブライジである。131は偏平な板材。132は「L」字状に段部を作り出す厚みのある部材であり、台輪等の建築材の再加工品と考えられる。樹種はアカガシ亜属である。133はコナラ属アカガシ亜属の芯持材で、柱材の転用である可能性が高い。

134は加工棒。135は槽の破片とみられるが、腐食が進んでいる。樹種はマツ科モミ属である。139は不明部材であり樹種はクリ。141.142は不明部材で、一部に方形の切り込みや削り込み加工が確認できる。

143.144.146は加工棒。

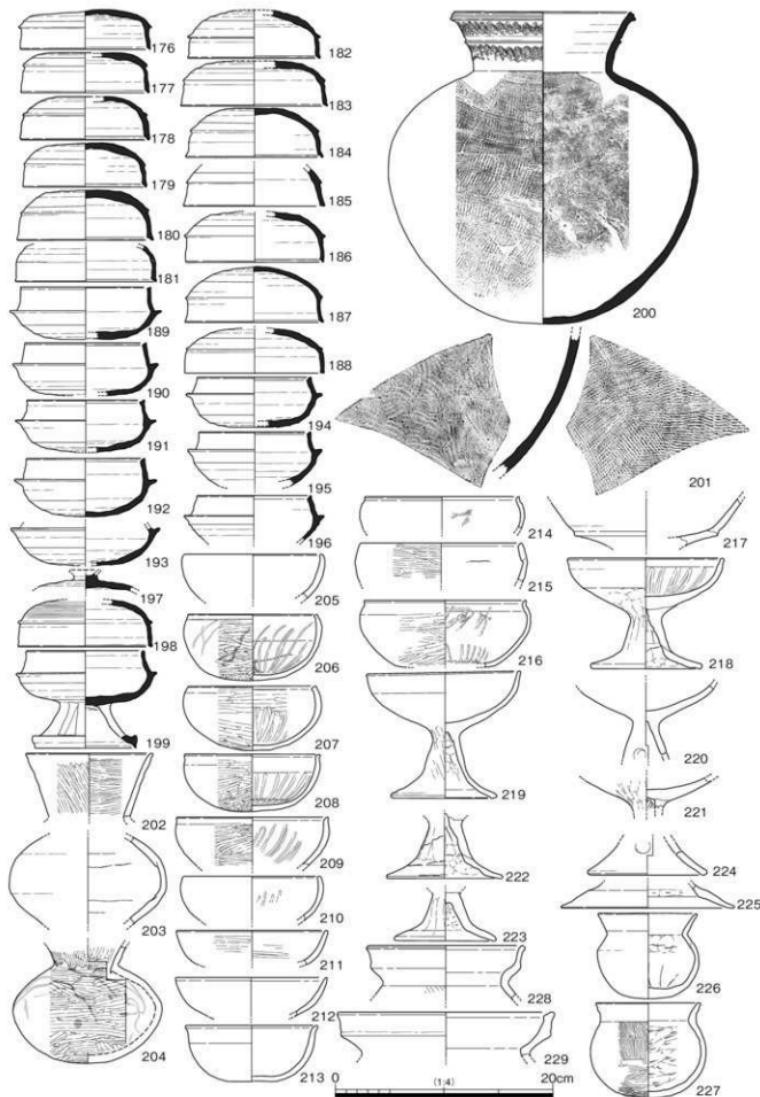


図 22 4区 SR4001 中層出土遺物(1)

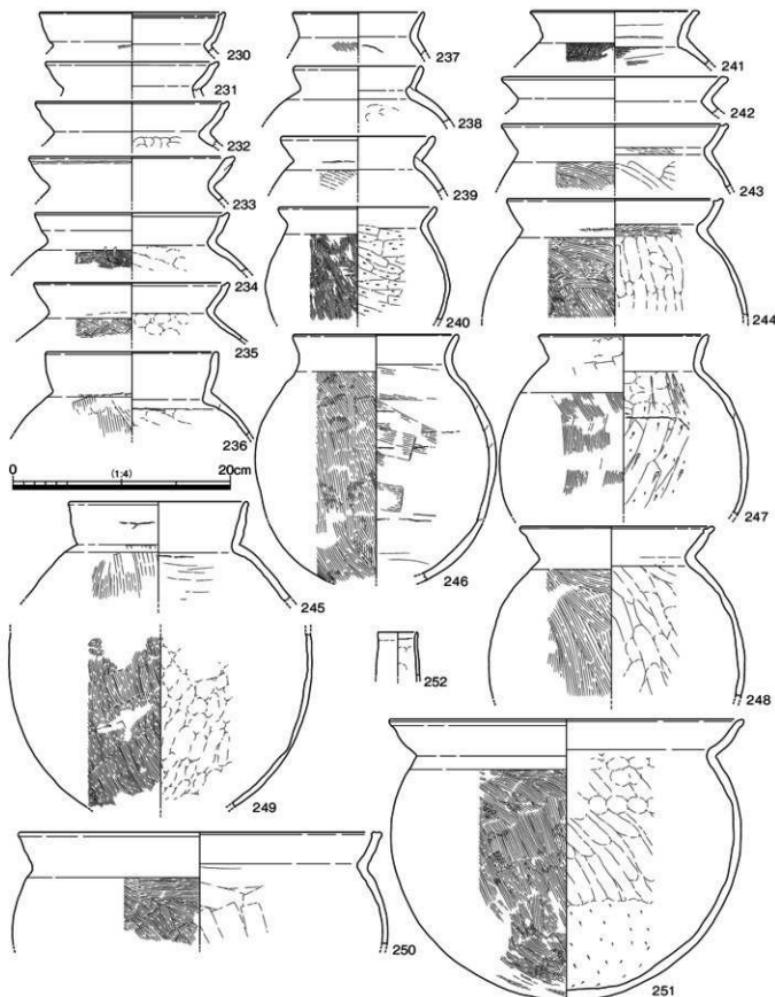


図23 4区 SR4001 中層出土遺物(2)

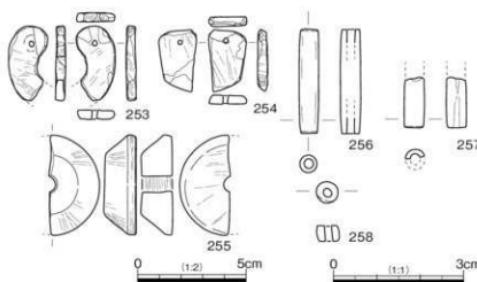


図24 4区SR4001中層出土遺物(3)

可能性があるが、表面の腐食が著しく、現状の形態から判断できない。164は用途不明部材で、樹種はブナ科シイ属である。

165は、組み合わせ跡ともみえるが、柄孔に見立てた孔の角度に違和感があり不明とせざるを得ない。166は横柾。167は馬鎌の台木であり、引棒固定と考えられる例り込みが確認できる。169は台木167との関係から馬鎌の盾と判断し、樹種は167、169ともにアカガシ亜属である。

168は鈍柄の取手。170～172は樹皮を多く残す加工棒で、170、171は尖端加工と枝落としのみ行われる。172は有頭状の加工がみられる。173は分枝した木枝の先端を加工する箇で、樹種はクスノキ属である。174は両端に仕口とみられる抉れがみられることから建築材の垂木と推定した。175は加工棒である。

図22～26は中層上位出土資料で、土器・木器とともに4区①西側でやまとまって出土している。出土状況は図版9、10を参照していただきたい。

176～196は須恵器蓋杯。TK23～TK47型式併行期の資料と考えられる。197～199は有蓋高杯、200は頭部に波状文帯をもつ広口壺であり、これらも蓋杯と同様の年代と考えていいだろう。

202～204は土師器直口壺である。204の胴部外面には被龍痕が明瞭に観察できる。205～216は土師器杯であり、精製された胎土をもつ。須恵器蓋杯に伴う資料として型式学的な矛盾はみられない。

217～225は土師器高杯で、屈曲形（217）を除いて楕円高杯が主体となる。226、227は土師器小型丸底壺である。土師器器皿（228～249）は口縁部形態や長胴化傾向の有無などにバラツキがみられ、須恵器蓋杯にみられるような時間幅をもつと考えられる。250、251は土師器大型鉢である。

253～255は滑石製の模造品である。253は勾玉形、254は劍形で、紡錘車（255）は無文である。256、257は管玉であり、256は滑石製、257は凝灰岩製とみられる。258は滑石製の白玉である。

図25、26は中層上位出土の木器である。259は長さ約1mを測る大型材であり、欠き込みによる仕口が確認できることや法量からみて梁や桁などの建築部材と考えられる。両端が切り落とされているので転用を受けていて、樹種はヒノキ属。260は不明部材であり、樹種はアカガシ亜属。

261、262はヒノキの板材。263は小さな欠き込みがみられ何らかの部材と考えられるが、小片であり不明とする。264はヒノキ材の有孔板。

266は劍形であり、切先付近を中心に菱形の断面を作出する完形資料。樹種はヒノキ属である。267、268も劍形の可能性があるが、小片であり判断できない。269は割り込みによる開部を作り出していることから、劍形と考える。樹種はサカキである。270は刀形の把部の破片で、樹種はアカガシ亜属である。271は結合部を欠損するものの、全体形状からみて指物腰掛の脚板と考えられる。樹種はヒノキ属である。272はアカガシ亜属で用途は不明とせざるを得ない。

に仕上げ、平面形も弓形を呈することから、刀形の可能性がある。152、154は板材で、154は片面全体が炭化する。155は琴柱形の2個一对の穿孔を持つ用途不明品である。156は下片に浅い溝状の加工を施す有孔板であり、現状で2孔の穿孔が認められる。

157は厚みがある板材であり、下部の片面のみケズリ込む。158は不明の棒状材。160、161はヒノキの板材。162は劍形であり、樹種はヒノキ属である。163は刀形の

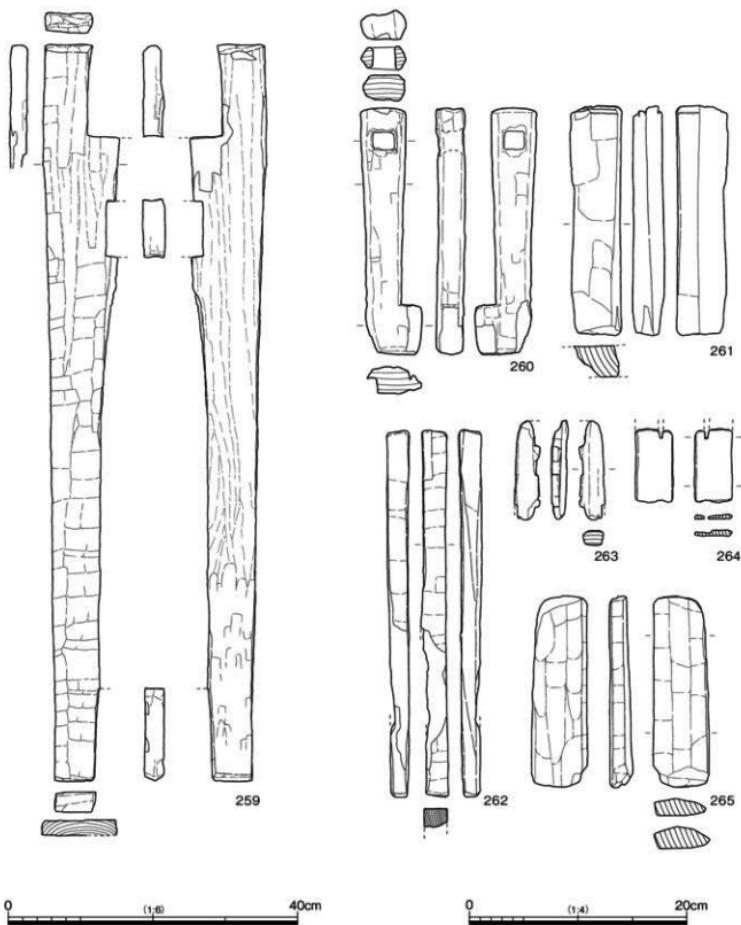


図25 4区 SR4001 中層出土遺物(木器)その1

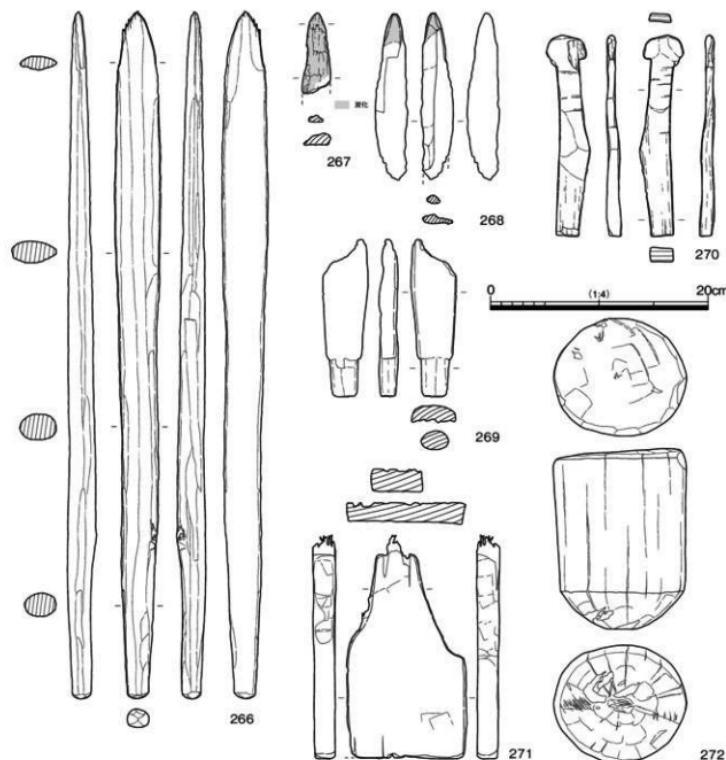


図26 4区 SR4001 中層出土遺物(木器)その2